

らどうでもいい話に、興味があるふりをして付き合っのがきつかつ

た。
あんまりにもしんどくて、一度、下野さんが休みの日に、屋上に

続く階段でこっそりご飯を食べたことがある。

誰とも話さず、音楽を聴いて、続きが気になっていた漫画を携帯

で読んで、少し眠って。休憩ってこういうことなんだと、しみじみ

感動した。明日からは下野さんに言って抜けさせてもらおうと決意

した翌日、総務一課から、「昼食は所定の場所ですってください」

という注意メッセージが回ってきた。

記憶の蓋をめくると、心の皮も一緒にべろんと剥がれるような痛

みに襲われる。思い出したくない、けれど、思い出さなければ飛鳥

くんにはたどり着けない。もう少しだけ、剥がす。

十一時半頃に、田島課長たじまがまず昼休憩に出る。その後、私と下野

さんのペアと、内海係長うちみと八木やまさんのペアが交互に出る。十二時半

からの組と、一時半からの組。私と下野さんは週に二回、外に食べ

に出ていた。週の前半と後半で一回ずつ、量も味付けもちよどい

い、会社からは少し離れたこのカフェに。

気が重い。心臓に鉛でも埋め込まれたような重さだ。このカフェ

エピソード
(第1回)

(22)

「ヨーギルトとガの
3.ト=はめくさいま下ね...」
「あさる」の(3)の
「あさる」の(3)の
「あさる」の(3)の
「あさる」の(3)の